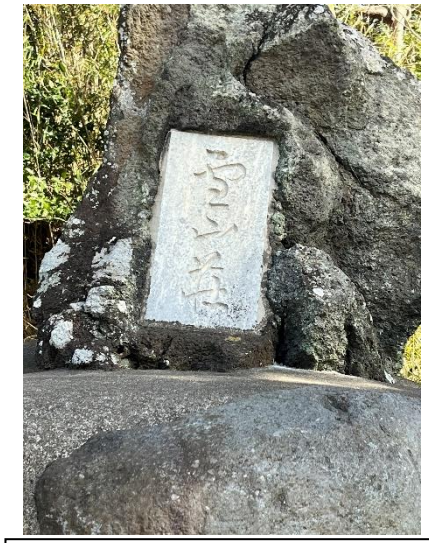
戸田は、最高幹部二十数人を連れ、静岡県・畑毛の雪山荘に、第五十九世の法主であった堀日亨を訪ねた。

ここ畑毛は、第三祖日目上人出生の由縁の地である。今、その雪山荘に八十四歳の堀日亨が住んでいた。濃い眉毛は真っ白になっていたが、仏法哲学の一切に関して、当代並ぶ者もないと、内外の識者に知られていた。この大碩学は、すべての宗内の役職を早くから放棄し、矍鑠（かくしゃく）として、研究に全生涯をかけてきたのであった。戸田の一行は、午前十一時に東京駅を出発した。函南駅という閑散とした駅で下車。バスに乗り換え、二十分ほどで畑毛に到着。

（人間革命５巻より）



在りし日の堀上人

伊豆の畑毛の地は、その名の通り、清流にうるおい緑なす田園地帯である。陽光は明るく温暖で、北には雄大な富士の姿を仰ぐことができる

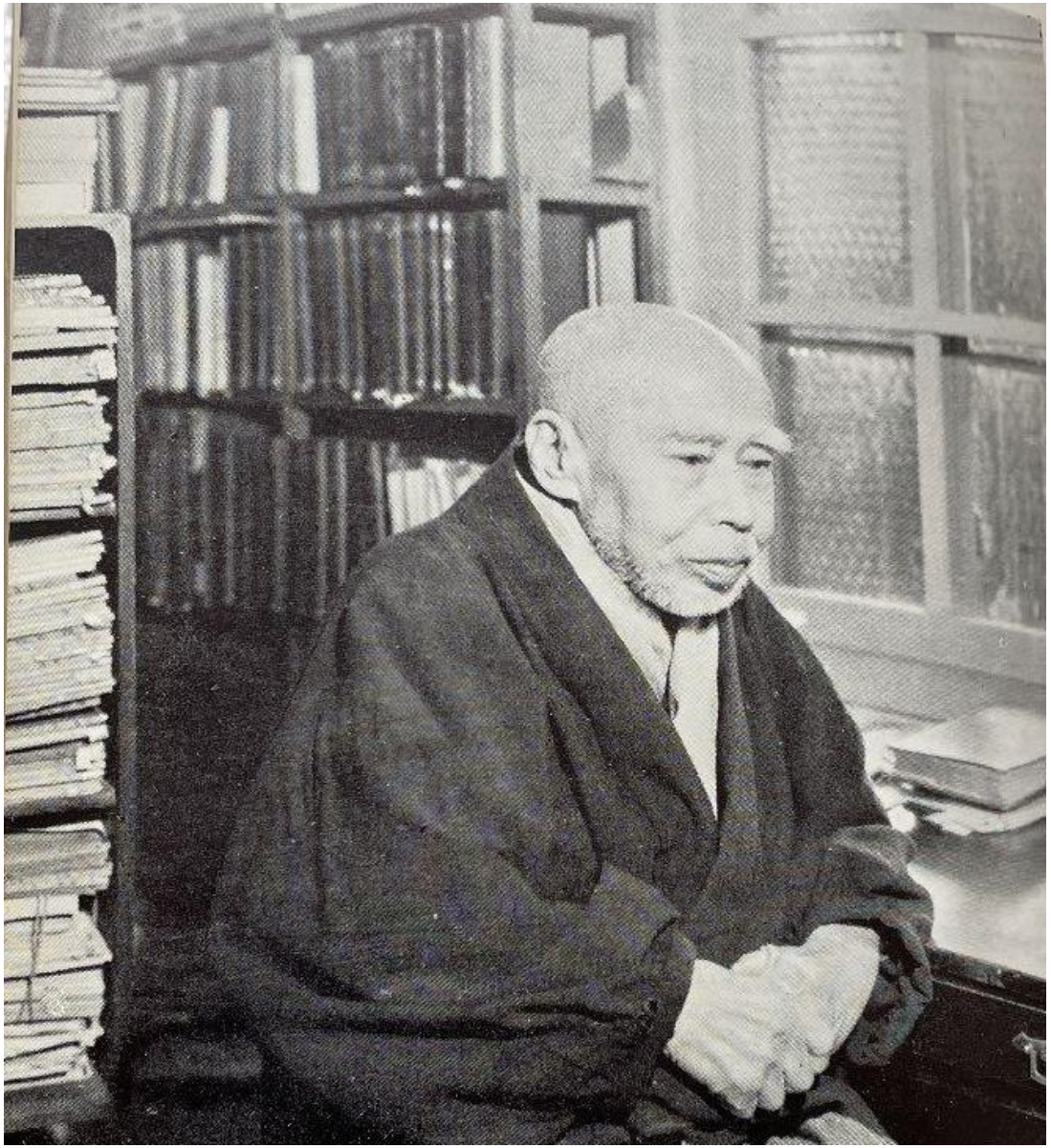
ちなみに日亨上人は、この畑毛の新田家ゆかりの地に「雪山荘」を構えられ、そこで晩年を過ごされている。

『御書全集』の発刊のため、戸田先生と私たち青年部で、この畑毛の日亨上人のもとを幾度となくお訪ねしたことも、忘れ得ぬ思い出となっている。

（1989.2.2　記念関西支部長会スピーチより）

二十分ほどで畑毛に到着。坂を上って雪山荘に着いた時には、雨が盛んに降っていた。　（人間革命　５巻より）

左の坂道を登り切った所に　雪山荘の建物はあった



雪山荘の堀上人

堀日亨は先に立ち、一同を書庫に案内した。独特の設計による書棚には、おびただしい書籍が整然と分類され、所狭しと積み重ねられていた。

日亨は、古文書読みにかけては当代随一との世評が高かった。仏教に関する古今の典籍は、すべて整っているように思われた。また門外不出の秘伝書も多く、当代随一の書庫といってよかった。これらすべてを基にして執筆した『富士宗学全集』百三十四巻も置かれていた。

一同は、これらの膨大な文献を目にするだけで、仏法の深遠な理念に思いを馳せ、そして、御書編纂に従事する自信さえも湧いてきた。

（人間革命　５巻より）

談笑する堀上人と戸田先生

書庫を出しなに、戸田は感嘆しながら言った。

「猊下。現下の六十年にわたる人知れぬ研鑽は、立宗から七百年後の今日、大聖人の完璧な御書が初めて発刊されるためにあったように、私には思えます」

日亨は、にっこり笑って答えた。

「そんなものかも知れんのう」

このたびの企画に、誰よりも積極的だったのは、日亨であったかもしれない

（人間革命　５巻より）

時を忘れてしまった。

バスの最終便を逃してしまったことに気づいた。皆は慌てたが、戸田は落ち着いて言った。

「今夜の汽車に間に合いさえすればいいじゃないか。これも思い出だ。函南駅まで、皆で歩とうよ。さぁ、それでは、そろそろ、おいとま申し上げよう」

玄関に出た。辺りは暗闇である。降り続いていた雨は、いつしか、やんでいた。すがすがしい大気、すがすがしい心境である。

今も残る井戸のあと

だが、暗い夜道は長かった。明かりもない泥道である。足を滑らせて頓狂な声をあげる人もいる。息を切らしている人もいた。ぬかるみに靴を取られそうになり、助けを呼ぶ人もいた。一時間半もの強行軍で、やっと函南駅にたどり着いた。午後八時四十分発の東京行に間に合った。雨はまた、こらえかねたように山間に降り注いできた。

（人間革命　5巻より）

富士宗学要宗第九巻には、

「創価教育学会は、昭和 18 年の 4 月には豆北（函南町）の雪山荘を大善生活同志の本部とするの盛挙を為す」

と記されているが、これは実現しなかったようだ。

記念碑が建てられている